

「天皇」号成立推古朝説の系譜

——もう一つの邪馬台国論争的状况

はしがき

わが国における「天皇」号がいつ頃から使用されたかについては、長い研究史がある。ここでは、「天皇」号成立の年代について考察する前提として、推古朝成立説の系譜をたどり、その研究者集団の位置づけを試みたい。

養老儀制令に

天子。祭祀所_レ称。

天皇。詔書所_レ称。

皇帝。華夷所_レ称。

とある。日本思想大系『律令』（岩波書店、一九七六年）の補注には

次のような解説を付している。

天子 天命を受けて国君となった人。国を治めるべき天に代わって天下を治めるので天帝の子、すなわち天子と称した（以下略）。

天皇 日本の国王の尊称。古くは大王（おおきみ）と称したが、推古朝の頃より天皇の称号を用いるようになった。天皇とは中国では三皇のうちの天皇でもあるが、いっぽう道教では天帝、またはその象徴たる北極星の異名として、特殊な宗教的性格を濃厚にもっていた。おそらくそこに眼をつけて、日本の国王の称号として採用し、中国の「皇帝」に対抗しようとしたものであろう。

皇帝 皇帝とは中国で三皇五帝をあわせた名称。秦の始皇帝に

千 田 稔

はじまる天子の別称。

右の解説について、注意したいのには、推古朝より天皇号を用いたとする説をあたかも通説のように記述している点である。日本の場合（日本という国号の始用年代は別稿で述べることにする）、国の最高位者の名称は、ある時期から「天皇」号を用いたことは、いまさら言うまでもない。右の解説において、天皇の意義について、中国の三皇説と道教の天帝説の併記をとっているが、道教の天帝に天皇号の由来を求めている。しかし、天帝がなぜ天皇となるかの説明を欠いている。三皇とは、中国の古代伝説上の三帝王を指すが、諸書によつて三皇の名は一致していない。三皇について『漢語大詞典』（上海辞書出版社、一九八六年）では「伏羲・神農・黄帝」（『周礼』春官）などの説をあげ、天皇を三皇の一つとする「天皇・地皇・泰皇」（『史記』秦始皇本紀）、「天皇・地皇・人皇」（『芸文類聚』卷十一引『春秋緯』）などの事例と出典を掲げている。わが国における「天皇」号は『史記』によつたことは疑わしいとするのが私見である。わが国の六国史でも「天子」「皇帝」については少数用例はあるが、正式の称号とはみなしがたい。

『日本書紀』で「天皇」を指示する意味で「天子」を用いているのは、履中天皇五年十月条、顕宗天皇二年八月条、継体天皇元年二月四日条、安閑天皇元年十月十五日条の四例である。さらに、注意

しておきたいことは安閑紀以降に「天子」の表現をみないという点であり、おそらくある時点で国王の公式称号としては少なくとも養老儀制令のごとく詔書に用いる「天皇」をもって定めるとなったと考えられる。「皇帝」については、『日本書紀』では「天皇」の意味として使われた用例はない。なお、『続日本紀』天平十五年十月十九日条に、聖武天皇の恭仁宮から紫香樂宮への行幸について「皇帝御二紫香樂宮」という記事があるが、なぜここに「皇帝」という文字が用いられたかは判然としないが、例外とすべきであろう。以下、「天皇」号推古朝成立にかかわる諸説と反論について検討したい。

一 津田左右吉の「天皇考」

——法隆寺金堂薬師像光背銘と天寿国繡帳

天皇号に本格的に論及したのは津田左右吉の「天皇考」である。⁽¹⁾その要点について次に列挙したい。

①推古天皇の時代に「天皇」という称号が用いられたのは確実である。その理由は、推古天皇の丁卯の年に書かれた法隆寺金堂の薬師像の光背の銘に「池辺大宮治天下天皇」とあることによる。

②右の例から考えると、推古紀十六年条にみえる「東天皇敬白西皇帝」という表現も文字通りに承認して差しつかえないかも知れない。ただし『隋書』の記事と対照して研究すべきで、疑いを容れる

余地はある。

③推古朝より前に天皇という称号が用いられたことを確実に示すものはない。『古事記』の歴代の称号は最初の五代を除くとすべて「某命」とあつて「某天皇」としないのは、原本の「帝紀」の書き方をそのままに踏襲したものらしくそれは推古天皇までを含んでいるので、推古朝においても「天皇」は公式の、あるいは一般に承認された称号ではなかったことが推定できるのではないか。帝紀の原本に「天皇」とあれば、安万侶が、それを故らに「命」と書く理由はないであろう。

④推古朝に「天皇」という称号が使われたとしたら、中国における「天皇」という成語について検討しておかねばならない。「天皇」という称号がわが国で採用されたのは中国の道教にその名を求めることができる。本来「天皇」は天空の星と結びつくものであり、北極星の名となり神仙の意味をもち、宗教的対象としての天帝とみなされる。そのような意味づけにおいて比喩的あるいは附随的に君主という観念が伴っていた。

こうした「天皇」という用語は、推古朝においても知られていたと思われ、中国の南北朝時代に右のような思想がわが国にもたらされた。道教そのものとして伝来しなかったとしても、それに関連する知識は伝えられたにちがいない。

右に要約した津田の「天皇」号成立の論点の中で「天皇」の意味

については、福永光司の指摘と共通する⁽²⁾。ただ、福永は推古朝成立の立場をとっていない。ただし、津田の論旨は、焦点をしぼりきっていない。つまり、推古朝に「天皇」号が使用されていたとしても、一般に承認されていなかったというのだが、その意味するところが判然としない。それならば、『日本書紀』推古十六年条の「東天皇敬白西皇帝」は非公式の表現として『日本書紀』に採録されたのであろうか。

二 福山敏男の推古朝成立説に対する史料批判

天皇号のはじまりを推古朝とする一つの論拠である法隆寺金堂の薬師像光背銘については早くに福山敏男の史料批判がある⁽³⁾。「天皇」号成立論は基本的に福山説と津田説の対立として展開していく。以下は福山説の骨子であるが、後年の対立点を摘出しながら記述したい。

①光背銘にある「歳次丁卯年仕奉」については、推古朝の丁卯年(六〇七)のこととも考えられるが、後年この像の「縁起文」として書かれ、ここに彫られたともみることができるといわれる。「池辺大宮治天下天皇」は過去の天皇を指しているが、「小治田大宮治天下大王天皇」のような丁寧な呼称は、現在の天皇のことではなく、むしろ小治田天皇(推古天皇)よりも後の時代に書かれたと解するのにはふさわしい響きをもっているのではあるまいか。

②「天皇」という用語についての問題である。五世紀前半の終わり頃と考えられる肥後の江田船山古墳（熊本県和水町）出土の大刀の銘文には「治天下獲□□□□鹵大王……」⁴とあり、六世紀初頭のものと思われる紀伊隅田（和歌山県橋本市）の八幡社所蔵の鏡の銘文には「癸未年八月日十大王年……」（八月日十、大王年）とよむべきか、「八月、日十大王年」とよむべきかは疑問）とあり、記紀よりも成立が早いと想定されている上宮記に「伊久牟尼利比古大王」「伊波禮宮治天下乎富大公主」（『新日本紀』十三所引）や同書下巻の注にも「他田宮天下大王」（平氏傳勅文下三）とあり、「天皇」の語は見えない。

③推古天皇十六年紀に「東天皇敬白西皇帝」とあるのも、おそらく書紀の編者が『隋書』に「日出處天子、致書曰没處天子」とあるのを見て、このように書きかえたものであろう。

④大化元年紀の詔勅に「明神御宇日本天皇」とあり、大化二年紀の詔勅に「明神御宇日本根子天皇」とあるのも、その「御宇」や「日本」の用語から考えても、大化当時の文書のままではなく、後世、おそらく書紀の編者によって書きかえられたものであろうと考えられる。それ故に、薬師像光背銘に「天皇」の語が三度も見えているが、推古朝よりも降った時代に書かれたとするのが穩当ではあるまいか。

⑤したがって「大王天皇」の語が不自然である。「大王」と「天

皇」とは全くの同義語である。おそらく銘文が書かれた頃は、このような文体の場合は専ら「天皇」の語のみ用いられて、「大王」の語が普通には用いられなかったらしく、そのため推古天皇のことを「大王」と記した古い記文などによつて、漫然と「大王天皇」という語を構成したのであろう。

⑥次に「聖王」の語である。もしこの銘文が丁卯年（六〇七）当时に書かれたものとすれば、太子は、生前にすでに聖王によばれていたことになる。しかしこの名は没後の尊称であるとする説に従うと、銘文もまた太子逝去後の成立と解することができる。

以上の諸条件を考慮にいと、法隆寺薬師像の光背銘文は、推古朝当時のものとするよりも、むしろ天武朝またはそれ以降において書かれたものとした方が穩当である。

三 「大王」号から「天皇」号への移行

通説にしたがえば、「大王」号から「天皇」号へと移行したとするが、「大王—帝—天皇」という一説もある。しかし、後者については「帝」は最高権力者の普通名詞で称号ではありえないであろう。本稿では通説にしたがう。

「大王」号の吟味については大橋一章の論考⁵に詳しいので、以下にその要約を掲げる。

「大王」号の用例を金石文とその他の史料によつて検討すると二種

類の用例が認められる。一つは君主に対しての用例と、他は君主以外の人物に用いた場合である。「大王」号が君主以外の人物に用いられた初例は次にあげるように聖徳太子である。

伊予温泉碑	法王大王
天寿国續帳銘	大王
上宮記	法大王
或書	坐伊加留我宮共治天下等己刀弥々法大王
日本書紀	法大王
元興寺縁起	大王・大々大王
元興寺丈六銘	等与刀弥々大王
大安寺縁起	大王

聖徳太子以外に「大王」が用いられた例は次の三例である。

尾張皇子	尾張大王	天寿国續帳銘
山背皇子	尻大王	上宮記
田村皇子	大王	日本書紀

聖徳太子をも含めて君主でない人物四人が「大王」と称されている。山背皇子と田村皇子は皇位継承となるべき人物であったので、

君主号としての「大王」号が例外的に使用されたという解釈もできないことはない。ところが尾張皇子は推古女帝の御子であったにもかかわらず、皇位継承者として有力視されていなかったが、續帳銘文に「尾張大王」とある。これについての明確な理由は見いだしたいが、つまり「大王」号が用いられる根拠が最も薄弱と思われる尾張皇子に「大王」号がつけられたことにこそ、「大王」号が君主の称号でなくなつたということを意味するものにほかならない。

君主の位についていないにもかかわらず「大王」号がつけられた聖徳太子、尾張皇子、田村皇子、山背皇子の四人に共通するのは、いずれも推古女帝かあるいは推古朝に関わる人物ということになる。「大王」号が皇子達に格下げして適用されていることは、この時代になって「大王」号に代わる新しい君主号として「天皇」号が始用されたのであろう。

以上が大橋による「大王」の用例の列举とその解釈である。まず、聖徳太子について小考しておきたい。右の用例から特異な称号を見いだすならば「法大王」である。『日本書紀』の用明紀元年条に用明の男の第一として「厩戸皇子」を挙げ、別名として「豊耳聰聖徳」と「豊聰耳法大王」を記している。「法王」は、中村元「仏教語大辞典」（東京書籍、一九八一年）によれば、「①法門の王の意味で、仏のことをたたえていう名称」、「②正しい法にしたがって統治する国王」等の説明を付しているが、仏門に帰依した王のことをい

うとしてよく、聖徳太子は仏法を深く信仰したから「法大王」と称されたのであることは間違いないとしてよい。次に大橋が皇子たちの称号が「大王」であることについての懸念である。それも特に問題とすることもあるまい。万葉歌に「王者 神西座者 天雲之五百重之下 爾 隱賜奴」(巻二・二〇五)とある「王」は天武の第六皇子で弓削皇子を指すが、歌のよみは、「おほきみは 神にしませば 天雲の 五百重(いほへ) が下に隠り給ひぬ」で、皇子もまた「王」であっても「おおきみ」と呼ばれた。だから、皇子たちの表記も、発音にひかれて「大王」であった可能性は認められなければならない。右のような理由でもって、皇子たちが「大王」と記されたという例外といってもよい程度の表記から、「天皇」号の成立を推定するわけにはいかない。

推古朝に「天皇」号は未だ成立していなかったことについて渡辺茂は次のような理由をあげる。⁽⁶⁾

憲法十七条の全条文のなかに「天皇」という用語が一つも見当たらぬ。

a. 推古朝説が成立するならば、憲法十七条のなかに「天皇」の語句が一つも含まれていないことは甚だ不可解である。

b. 十二条の冒頭に「国司国造、忽斂百姓」(国司・国造、百姓に斂(をさめ)らざれ)とのべ「所任官司、皆是王臣、何敢与公、

賦斂百姓」(所任る官司は、皆是王の臣なり)と強調しているところからも、国司国造(推古朝に国司という官職はなかった)の上にある現実の君主は「君」ではなく「王」である。この「王」こそ「大王」を意味しているので、「天皇」という称号はなかった。

四 「大王天皇」の意味

法隆寺薬師像の光背銘にみる「天皇」号に関しては、竹内理三は福山説に異論をとなえる。⁽⁷⁾それによると、推古天皇のことを「大王天皇」と刻んでいるが、「この薬師仏像の製作年時がたとへ八世紀初頭のものであるとしても、称号そのものは「七世紀中葉、推古時代のものであり、この言葉の中に、日本の『天皇』なる称号が成立した過程を遺憾なく示してゐると思ふのである」と述べる。この竹内氏の推考に仮にしたがうならば、推古朝の丁卯年(六〇七)に刻銘されたとしても、銘文は推古朝に「天皇」号が存在したと読むことができ、推古朝よりさかのぼって用明朝にも、推古朝と齟齬しないように「天皇」号を用いていたと刻銘されたということになる。しかし、この論理は、用明朝の「天皇」号成立を検討しないで不問に付すことになる。

「大王天皇」については、大橋一章の次のような解釈もある。⁽⁸⁾

光背銘には用明天皇は「池辺大宮治天下天皇」とあり、推古女帝に使われている「大王天皇」とは異なる。それは推古朝の特殊事情のもとに「天皇」号が始用された経緯を示すものである。推古女帝は政治的支配者「大王」と絶対的支配者「天皇」という二種の君主の性格を有していた。すなわち推古女帝ははじめ「大王」位につき、聖徳太子の摂政とともに「大王」号とは意味の異なる「天皇」号が採用され、「大王であつてしかも天皇である」ということから「大王天皇」と呼称された。この「大王天皇」は推古女帝に対してのみ用いられた称号であつて『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』にも「又大々王天皇令治天下時」とあるのも同天皇をさす。

しかし、大橋が説くように、推古女帝について「大王」号から「天皇」号へと称号が変化ししたとするならば、用明に関しては、竹内説と同様に「池辺大宮治天下天皇」の「天皇」号は、追贈と解していると思われる。だが、推古朝に「大王」号という称号の使用がなされていたと大橋がいうのであれば、用明にことさら「天皇」号を付する必要はないはずである。光背銘が推古朝より以降に刻まれたとしても、「大王天皇」の意味を理解できる余地は十分にある。例えば、すでに天皇の称号をもったとみなすことのできる持統の吉

野行幸に同行した柿本人麿の万葉歌に「吾大王」（巻一—三十六）と記されていることから、「天皇」と同じ意味で「大王」という用字があるので、「大王」という表記は継承されていたと理解できるとすれば、「大王天皇」は「偉大なる王者天皇」と解して、この場合の「大王」は「天皇」にかかる形容句ということであり、「大王天皇」の語句をことさら、「大王」号から「天皇」号への変化の時期の表記とまで読み取らねばならない積極的な理由は見当たらない。

五 天寿国繡帳による考察

前掲の「天皇」号始用論についての大橋説は天寿国繡帳の研究の付論であるが、主題である天寿国繡帳についての論考において考察された繡帳の製作年代が推古朝とすることと対をなすものである。

よく知られているように天寿国繡帳は、推古三十年（六二二）に聖徳太子が没したので、妃の一人橘大郎女（位奈部橘王）が太子のためにつくらせたと伝える繡帳そのものは、一部が額装として中宮寺に所蔵され、その他に断片が正倉院・法隆寺・東京国立博物館等に現存する。もともと天寿国繡帳は、一〇〇個の亀甲に四文字ずつ、四〇〇文字の銘文があつたが、その多くは失われたが、『上宮聖徳法王帝説』に全文が引用されている。

この天寿国繡帳の成立年代を銘文から推定する試みがなされてきたが、林幹彌は銘文の天皇名に着目した。⁹⁾ 銘文の天皇名は次の通り

である。

「阿米久爾意斯波留支比里爾波乃彌己等」(アメクニオシハルキ
ヒロニハノミコト・欽明)

「尔奈久羅乃布等多麻斯支乃彌己等」(ヌナクラノフトタマシキ
ノミコト・敏達)

「多至波奈等己比乃彌己等」(タチバナトヨヒノミコト・用明)

「等己彌居加斯支移比彌乃彌己等」(トヨミケカシキヤヒメノミ
コト・推古)

林は、これらの天皇名を和風諡号であるとみなし、和風諡号は、
記紀の編纂に際して撰進されたと考えられるので、續帳銘文は天武
朝をさかのぼることはないとした。

以上に加えて林は續帳銘文の天皇名に「斯埴斯麻宮治天下天皇」
(シキシマノミヤニアメノシタシラススメラミコト)という欽明天皇を
指す名称が記されているが、宮号を冠して天皇を呼称するのは大化
以降として續帳銘文の成立もまた大化以降と推論した。林は、天皇
は当代において一人しかいないので特別に個別的尊称は必要でない
が、過去の天皇については宮号を冠することによって個別的尊称と
する必要があるとした。

一方大橋は、まず、宮号を冠する天皇の呼称について次のように

解釈する。⁽¹⁰⁾ 法隆寺の薬師像光背銘の「池辺大宮治天下天皇」(用明
天皇)は、推古天皇より二代前、つまり過去の天皇を指しているこ
とはいうまでもない。ところが「小治田大宮治天下大王天皇」(推
古天皇)の呼称は光背銘の成立が推古朝ならば当代の天皇であるが、
銘文の成立が推古より後の時代とする説ならば、宮号を冠する天皇
名は過去の代の天皇に関するものとなる。つまり宮号を冠した天皇
の呼称が過去・現在どちらを指すかは、そのみでは決定的では
ない。そのこととともに大橋の論点は和風天皇名の解釈に重点がお
かれる。右に示した續帳の音仮名で表記された天皇名について大橋
は、天皇の即位にあたって奉られた尊称で、推古朝における聖徳太
子の修史編纂時期にすでに存在したものと思われること、和風の天
皇名が記されているので續帳銘文の成立を天武朝以降とすることが
できないという。したがって續帳銘文の成立を推古朝と想定するこ
とに問題がないとする。

この場合林の論点は、「天皇」号の成立年代に重きをおいた議論
ではなく、眼目は天寿国續帳の年代であるのだが、續帳の銘文が天
武朝をさかのぼるものではないとしたので、續帳から「天皇」号成
立を推古朝とすることは不可能であることを論じたにすぎない。さ
らに、宮号を冠する天皇名は、過去の天皇について称されるところで、
この議論は、前掲の法隆寺金堂の薬師光背銘に再検討を迫るもので、
「小治田大宮治天下大王天皇」という呼び名が過去の天皇なのか、

推古朝当代なのか、むしろかしい判断を迫ることになった。林の見解によるならば、過去の天皇となるから、光背銘は推古没後に刻まれたとしなければならぬ。大橋は宮号を冠した天皇は、当代のそれか、過去のものか、それだけでは決定できないとする。しかし、古代史の史料の通例として、当代の天皇に宮号を冠することはなく、光背銘の刻まれた年代も舒明朝以降の可能性が否定できない。

義江明子は續帳に記された銘文から導く系譜関係の詳細な分析によって欽明に始まる王統と稲目に始まる蘇我氏という両系譜をとりあげ、敏達之母の石姫（欽明の皇后）が系譜にはあがっていない点に注目する。⁽¹⁾ 義江によればこのことは續帳銘系譜が天武・持統朝のころに成立したとすれば、このようなことはありえないという。そして續帳銘系譜は系譜様式および系譜意識という点からみていくかぎりでは、推古朝に成立した蓋然性が最も高いと述べる。それを受けて義江は銘文が推古および王統の始祖と位置づけられた欽明のみ「天皇」の称号を用いていることは「天皇」号の成立の端緒段階を示すとも可能なのではないだろうか、と述べる。

義江説に対しては、東野浩之は、「系譜に推古朝の要素があるからといって、銘文が全体として推古朝のものであると断ぜられまい」という。⁽²⁾ そして銘文中の「等己彌居加斯支移比売」（トヨミケカシヤヒメ）に注目する。この名称は山田英夫の見解にしたがってトヨミケカシヤヒメは単なる尊号ではなく、推古の和風諡号とす

る説を認める。「等己彌居加斯支移比彌」が推古天皇の生前における尊称なのかそれとも諡号かによって續帳銘文の年代論は重要な差を生じる。後者とすれば舒明朝以降に銘文が記されたことになり、續帳の銘文にある「天皇」号をもって推古朝における使用例とすることはできない。

續帳の図様についての東野の総括的な年代論は次のように示されている。⁽³⁾

太子生前の行実を續帳に図様化するとすれば、推古末年から舒明朝頃ではなお多くの生存者がその図様に登場せざるをえない。古代において生存人物の容姿が多く画中に描き込まれるというのは、常識的には考え難いことである。その中に天皇や皇族が多く含まれるとなるとなおさらであろう。旧續帳（鎌倉時代に一部模作される以前のもの）の周縁に太子伝の図様があつたということは、續帳が太子没後かなりの年数を経てからの制作であることを示唆しているとみるべきである。

右のような論点から續帳の成立年代について東野は「天武朝」がふさわしいという。太子の舎人であった調子主麻呂の没年が己巳年（天智天皇八年、六六九）であるので、これなどが年代の上限の目安となること、續帳に描かれている俗人の男女が着用している褶（ヒ

ラミ)は天武天皇十一年(六八二)に禁止された服飾であるから下限はここに求められるとする。ただ幅二メートルをこえる二張の續帳を作る工程を考慮すると下限をいま少し広くとって持統朝頃までを想定すると東野はつけ加えている。

天寿国續帳の銘文に関して、もう一つの問題点は間人王崩日の干支である。銘文には辛巳年(推古二十九年)「十二月廿一日癸酉」とある。ところが推古朝に用いられていた元嘉暦ではこの日が甲戌となり癸酉ではない。これについて、宮田俊彦は廿一日が崩日であることが、まちがいないとすればさらに崩後間もなく母王の崩日の記録を誤ることが考えられないとすれば、銘文はかなり後に記されたと想定する。⁽¹⁵⁾

母王の崩日の辛巳年十二月廿一日癸酉が誤記かどうか、古代の暦との関係で金沢英之が興味深い指摘をしている。⁽¹⁶⁾『日本書紀』持統天皇四年条に元嘉暦と儀鳳暦の併用の詔を記している。つまり、これまで元嘉暦のみであったが、持統四年から新たに儀鳳暦が採用されるに至った。金沢は持統朝以降に採用された儀鳳暦ならば推古二十九年十二月二十一日の干支が何にあたるかを検討されるべきだとし、精微な計算を試みている。その計算法については金沢論文を参照されたいが、ここでは結論のみを引用すると、当該日の干支は癸酉になるという。したがって儀鳳暦によって母王の崩日の干支が記されている可能性が否定できず、それならば續帳銘文は持統朝かそ

れ以降に記述されたことになる。この金沢説を認めるとすれば、「天皇」号は持統朝かそれ以降に使用されていたことを確認することであるが、始用年代は不明である。

六 『隋書』との関連からの推考

「天皇」号の始用を推古朝とする吉田孝の説をとりあげたい。⁽¹⁷⁾まず、『史記』の次のような記述に吉田は注目する。

「王」は周では天子の称号であったが、戦国時代には諸国の支配者も「王」と称したところが秦王政は六国の「王」をすべて倒して天下を統一したので「王」に代わる新しい称号が必要となった。そのため臣下たちの審議の結果が上奏された。「古、天皇あり、地皇あり、秦皇あり。秦皇最も貴し」と。ところが王は「秦を去りて皇を著け、上古の帝位の号を采り、号して皇帝と曰はん」としたという。

吉田は右に引用した秦の重臣たちの上奏に「天皇」という言葉と、『隋書』倭国伝の開皇二十年(六〇〇、推古八年)の次の記事との関係から氏の論が述べられる。

「倭王姓阿每、字多利思比孤、号阿輩鷄弥、遣使詣闕」(倭王、

姓は阿每（アメ）、字は多利思比孤（タリシヒコ）、号は阿輩鷄弥（アメキミ、またはオホキミ）、使を遣わして闕に詣る。^{（18）}

アメは天、タリシヒコは「満ち足りた高貴な男子」の意と解され、大野晋説によれば阿輩鷄弥はアメノキミの可能性が高いので、「秦皇」と並ぶ「天皇」が「天」の字をふくみ、「王」の字をふくまないことが、倭の君主号としてふさわしいと考えられたのではなからうかと吉田はいう。

この説は、想定のもとに成立するのであって、裏付ける史料を欠くのだが、推古朝に「天皇」号が採用されていたならば、称号設定の一つの選択肢とみることができよう。

推古紀十六年（六〇八）九月条に小野妹子が隋に帰国する裴世清の送使として遣わされた時の国書の記述が「天皇」号始用の論点となってきた。つまりそこに「東天皇敬白西皇帝」（東の天皇が敬しみて西の皇帝に白す）とあり、「東」すなわち「ヤマト」には「天皇」号があつたと解釈することができれば吉田説は意味をもつ。

推古紀の「東天皇敬白西皇帝」という記事が推古朝「天皇」号成立の証明になるだろうか、

堀敏一は、この記事が推古朝に「天皇」号が成立したことを示すという。^{（19）}堀によると同年八月条に裴世清がもたらした隋の皇帝の国書との比較から推断できるとする。すなわち「皇帝、倭皇に問う。

……皇、海表に介居して……」とあるが、原文には「倭王」「王」とあつたはずであるという。それに対して右にあげた「東の天皇」という表記は、かつての「日出づる処の天子」と記して隋の皇帝をして不快感をいだかせたために「天皇」という称号を案出したと堀は解釈する。そして次のように述べる。

この国書こそ日本の君主の称号が天皇であることを、はじめて内外に明らかにしたものだといえることができるのではなからうか。隋代になつて中国と国交を回復する必要ができたとき、試行錯誤の末に推古朝の為政者が考え出したのが、この称号であつたのではなからうか。もつとも日本書紀が編纂物であるため、原文が天皇でなかったということも考えられないではない。

堀の見解は、右の国書で「天皇」ではなく「大王」ないしは「天王」などでは、前の国書の「天子」より後退しすぎて推古朝の為政者が使いそうにないというのである。堀の史料に対する解釈は、慎重であつて、推古朝に天皇号が始用されたと断定はしていない。ただ天子から天皇への変更が推古朝の為政者が君主の称号の格の後退を退けたのではないかという状況を想定する点に論拠を求めている。しかしそれならば、もともと推古十六年条の国書に「倭王」、「王」とあつたのを、日本（倭国）側で「王」を「皇」と書きかえて「日

本書紀』に掲載したというならば、その返書に、またしても隋側に不快感を与える「天皇」という「皇」の字を含む称号を用いた返書を送るであらうかという点にどうしても疑義をはさまざるをえない。右のような理由によると、推古紀の「東天皇敬白西皇帝」の表記をもつて「天皇」号の成立を推古朝に求めることはむずかしいといつてよい。

渡辺茂もこの記事に「天皇」号成立の根拠をもとめることはできないと、次のように述べる。⁽²⁰⁾

推古紀十六年条の「東天皇敬白西皇帝」の記事をもつて「天皇」号使用例の一つの根拠とする説があるが、この場合、その前年にあたる『隋書』の「日出処天子致書日没処天子」（日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す）についてふれていない。この『隋書』において、煬帝をして「蛮夷書有無礼者、勿復以聞」（蛮夷の書、無礼なる者あり。復た以て聞するなかれ）と言わしめた原因は「天子」という言葉を用いた点にあるならば、推古紀十六年条の「天皇」という用語が実態を示しているとは考えられない。さらに右にあげた『隋書』の記事の大業三年は推古十五年にあたり法隆寺金堂薬師像光背銘に記す「丁卯」年に相当する。仮にこの時代に「天皇」号が用いられたとすれば、国書に隋の「皇帝」に対する優越性を誇示する「天

皇」号を用いないはずはない。にもかかわらず「天子」号を称しているのは、「天皇」号がまだ使用されていなかったからでなければならない。以上の理由によって推古紀十六年条の「天皇」号をもつて推古朝に「天皇」号が最初に使用されていたとすることはできない。

七 推古朝説の系譜

以上に記したのは、推古朝「天皇」号成立説の主要な論点と異論を要約し、私見をそれに添えたものである。ところで、推古朝成立説の主張が、ほぼ東京大学や東京の大学の研究者によってなされてきたという特異な現象に気づく。それは、なぜであらうかという問いかけは興味深いのであるが、その答えはあるのか、それとも全くの偶然のことであらうか。

津田左右吉の「天皇考」が推古朝「天皇」号成立説の基本を作ったと認識してよいであろう。原論文の発表をうけて、福山敏男の異論がだされたことになる。津田は早稲田大学で教鞭をとったが、その前に東京帝国大学の東洋史の教授であった白鳥庫吉の主宰した満鮮歴史地理調査室の研究員であったので、両大学の歴史研究者との人脈は豊かであったと思われる。そのことに関係があるのだろうか、推古朝「天皇」号成立説は主として東京大学と早稲田大学にかかわりのある研究者によって展開していく。そして、不思議といつてよ

いのかどうかとまどうが、戦前まで、関西では福山を除いて、「天皇」号成立論に関心を示した研究者はほとんどいないとともに、戦後においても推古朝成立論を積極的に支持したものもない。

津田の影響をうけていると思われる竹内理三の前掲論文は九州大学文学部教授にあつたときに書かれたものであり、その後、坂本太郎は、東京大学文学部国史学科教授時代の昭和三十一年（一九五六）に、推古朝に「天皇」号が成立したと簡単に触れている。⁽²²⁾その理由として、推古四年造立の元興寺塔露盤銘、同十七年鑄造の元興寺丈六釈迦像光背銘、推古三十年在銘中宮寺天寿国續帳、推古十六年遣隋国書などに天皇号が用いられていることをあげて、これらの同時期的な表記は偶然とはいえないとして、推古朝における「天皇」号の成立を認めている。坂本太郎の後をうけて東京大学文学部国史学科教授の職についた井上光貞も推古朝「天皇」号成立説の立場で、次のように論じている。⁽²³⁾

まず注目すべきは、天皇という称号である。天皇は既述のごとく大君というのが古い言い方で、この古制は推古朝にも用いられたらしく、隋書には推古天皇を「阿輩難弥」と号したといっている。しかし一方では天皇号も用いられ、おそらくそれは推古朝に案出されたのである。六〇八年の隋帝への国書に「東天皇敬白^ニ西皇帝^一」といい、六〇七年の法隆寺の薬師像の造像

銘に「天皇」「大王天皇」といい、さらに右記の国史にも天皇記とあるなどがその証拠である。

ここに引用した井上の所説は、ほとんど史料の検討について触れていないので、井上の所論の根拠は知りがたいのが惜しまれる。

井上その後、石母田正は、前掲の諸説と、やや異なった視点から論じてはいるが、制度的であるという点にこだわらないという前提で、天皇号は推古朝に使用されたとする。⁽²⁴⁾石母田の論点は次の通りである。

「天皇」号の成立が、通説にしたがつて、推古朝であるとすれば、その歴史的意義も右の問題（日本が朝鮮三国と使節を交換するさい、「大国」としての地位を明瞭にすることなどの対外的問題―筆者注）と密接な関係がある。対外的にも、対内的にも、日本国を代表し統治権を総攬する主権者の地位を「天皇」という称号でもって制度的に統一し確立したのは、おそらく浄御原令以後とみられるから、推古朝以来の天皇号は制度的にはまだ不安定であつたとみねばならぬ。その成立期としての推古朝を問題とする場合、従来の「大王」から「天皇」への転換が、いかなる場においてまずおこなわれたかが問題である。私はその場は対外関係であつたろうとかながえる。

現在東京大学大学院人文社会系研究科・文学部の日本史学講座に所属している大津透は、前掲の大橋一章と義江明子の論考を評価し、推古朝に「天皇」号の成立を裏付けするのは天寿国續帳であるという。⁽²⁵⁾

右に簡略的に述べたが、明らかに、津田左右吉の先駆的な業績を追認するかのように、東京大学の国史学・日本史学の系譜につらなる研究者たちが推古朝「天皇」号成立説を共通して認めていることは、本稿では、一つの事実として確認しておきたい。そして、推古朝成立に異論を唱えた福山敏男は、京都帝国大学工学部建築学科を卒業し、のちに京都大学工学部の教授となる。福山の学的系譜に直接につらなるわけではないが、「天皇」号の成立を推古朝としない論考が、後年、関西周辺の研究者らによって報告されていく。それについては、詳細に述べるために別稿を予定したい。

なお、因みに、推古朝天皇号に異論を唱えた渡辺茂は、東京文理科大学史学科の出身である。

それにしても、「天皇」号成立に関する学説が日本の東と西という地域的な区分において、対立するのはなぜだろうか。いわゆる「邪馬台国論争」と相似するような印象を拭いきれない。私は、学派的対立という観点でこの種の問題を論じることが、もとより好まない。だが、東京を中心とする古代史研究者が推古朝に「天皇」号が成立したことを通説・定説とし位置づけることの不思議さと思う。

注

- (1) 津田左右吉『日本上代史の研究』（岩波書店、一九四七年）「天皇考」の原論文は一九二〇年刊行の『東洋学報』に掲載
- (2) 福永光司『道教と古代日本』人文書院、一九八七年
- (3) 福山敏男『法隆寺の金石文に関する二、三の問題』『夢殿』第十三冊鵜飼郷舎、一九三五年
- (4) 江田船山古墳出土の大刀の銘文についての読みから近年はワカタケル大王（雄略）に関わるという見解が通説となっているので、年代的には五世紀後半となる。
- (5) 大橋一章『天寿国續帳の研究』吉川弘文館、一九九五年
- (6) 渡辺茂『古代君主の称号に関する二、三の試論』『史流』八、一九六七年
- (7) 竹内理三『大王天皇考』『日本歴史』五十一号、一九五二年
- (8) 大橋（前掲（5））
- (9) 林幹彌『上代の天皇の呼び名』『史観』四五、一九五五年
- (10) 大橋（前掲（5））
- (11) 義江明子『天寿国續帳系譜の一考察―出自論と王権論の接点―』『日本史研究』三三五号、一九八九年
- (12) 東野浩之『天寿国續帳の制作年代―銘文と図様からみた―』『考古学の学際的研究―濱田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ―』岸和田市・岸和田市教育委員会、二〇〇一年
- (13) 山田英雄『古代天皇の諡について』『日本古代史攷』岩波書店、

一九八七年

- (14) 東野 (前掲(12))
- (15) 宮田俊彦「天寿国續帳」上、『歴史教育』六―五、一九三一
- (16) 金沢英之「天寿国續帳銘の成立年代について」―儀鳳暦による計算結果から―『國語と國文学』二〇〇一年十一月号
- (17) 吉田孝『史記』秦始皇本紀と『天皇』号、『日本歴史』六四三号、二〇〇一年
- (18) 吉田は引用文献をあげていないが、岩波古典文学大系『日本書紀』(下)における大野晋による補注であろう。
- (19) 堀敏一『中国と古代東アジア世界―中華的世界と諸民族―』岩波書店、一九九三年
- (20) 渡辺 (前掲(6))
- (21) 竹内 (前掲(7))
- (22) 坂本太郎「古事記の成立」同編『古事記大成』四、歴史考古編、平凡社、一九五六年
- (23) 井上光貞『日本古代国家の研究』岩波書店、一九六五年
- (24) 石母田 正『日本の古代国家』岩波書店、一九七一年
- (25) 大津透『古代の天皇制』岩波書店、一九九九年